

1 はじめに

平成24年度、市内西別府にあります^{おおだけ}大竹遺跡の範囲内で保存目的の範囲内容確認のための発掘調査が行われました。調査では、飛鳥時代から平安時代まで（7世紀後半から10世紀前半まで）の竪穴建物と掘立柱建物で構成される集落跡が発見されましたが、特に7世紀末～8世紀初頭の時期は、最も多くの建物が有った時期であったことが分かりました。

このたびは、その発掘調査により発見された集落跡の、主に竪穴建物跡から出土した遺物を展示します。この展示を通して、今から約1,350～1,050年前の古代幡羅郡家（郡役所）の周辺にはどのような人々の暮らしがあったかなど、昔に思いを馳せ、古代の集落、そして、幡羅郡家についての理解を深めていただければ幸いです。

2 大竹遺跡と今回の発掘調査成果について

大竹遺跡は、市西部の櫛挽台地縁辺部付近に立地する飛鳥時代から平安時代にかけての律令期の集落遺跡です。遺跡は、今回の調査箇所を西端にして、東西に長く約800mの範囲に広がり、東端の市立別府中学校の敷地内においても同様の時期の集落跡が発見されています。また、西に隣接する深谷市・下郷遺跡と一連の遺跡と考えられ、古代幡羅郡家関連（郡家造営のために集められた人々や郡家の役人が居住した）の集落と考えられます。

調査は、遺跡範囲の北西端部において行われました。検出された遺構は、飛鳥～平安時代の竪穴建物跡11棟、掘立柱建物跡1棟、土坑・ピットのほか、時期不明の竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡1棟などです。

竪穴建物跡は、7世紀後半が1棟、7世紀末～8世紀初頭が5棟、8世紀前半が1棟、9世紀末～10世紀初頭が2棟、10世紀前半が1棟、時期不明が1棟検出され、時期不明なものを除く10棟のうち、7世紀末～8世紀初頭に属するものが半数を占め、次いで9世紀末～10世紀初頭及び10世紀前半に属するものが約3割を占めるもので、この地



調査地点及び周辺遺跡分布図

区での集落形成の時期的特徴が見てとれます。

時期別の分布状況を見てみますと、調査区が北（B区）と南（A区）に分かれますが、最も古い7世紀後半、7世紀末～8世紀初頭、そして8世紀前半の竪穴建物跡が、いずれの調査区においても西寄りに集中して所在しているのが特徴です。また、7世紀末～8世紀初頭の時期には、検出されたのはわずか1棟ですが、やや離れた位置に掘立柱建物跡が伴います。

なお、竪穴建物のカマドが設置された箇所を見ますと、通常、時期で共通した傾向が見られますが、多くの竪穴建物が検出された7世紀末～8世紀初頭の同時期のものでも、長方形の平面形の短辺である北壁に設置されているもの、同じく短辺の南壁と反対の壁に設置されているものがありました。

出土遺物は、竪穴建物跡からは土師器^{はじきつき}坏^{かめ}・甕^{だいつきかめ}・台付甕^{すえき}、須恵器^{すえき}坏^{わん}・塀^{ふた}・甕^{つぼ}・壺^{かいうとうき}、灰釉陶器^{さいろうとうき}碗^{さら}・皿^{りよくゆうとうき}、緑釉陶器^{りよくゆうとうき}碗^{さら}、須恵系土師質土器^{すえきけい はじしつどき}坏^{かめ}・塀^{ふた}、口^{くち}ク口土師器^{くち はじしつどき}碗^{さら}、土^{どすい}錘^{こさね}、小^{せう}札^さや角^{かく}釘^{てい}などの鉄製品^{てつせいひん}、磨^{すり}石^{いし}や敲^{たたき}石^{いし}などの石器^{せきぎ}などが見られます。特徴としては、第8号竪穴建物跡から、土師器^{はじきつき}坏^{かめ}の内面^{うちめん}に「暗文^{あんもん}」と呼ばれる放射状^{ぱんしゃじょう}の線文^{せんぶん}様^{よう}を施^せした暗文^{あんもん}坏^{かめ}が多数^{たすう}出土^{しゅつど}しました。

また、特殊^{とくしゆ}な出土遺物^{しゅつど}として、第10号竪穴建物跡^{しやうけつ}から、小札^{せうさ}と^いって、鎧^{よろい}（挂甲^{けいこう}）の部品^{ぶひん}が出土^{しゅつど}しています。

このたびは、出土した遺物のうち、第1・2・3・4・8・9・10号竪穴建物跡、遺構^{いこう}に伴^{とも}わない遺構^{いこう}外^{がい}の出土遺物^{しゅつど}を展示^{てんし}しています。

3 展示資料を出土した主な遺構について

(1) 第1号竪穴建物跡（SI1）

A区の南東隅^{なんとうぐも}において検出^{けんしゅつ}されました。カマドは、東向き^{とうむき}の壁^{かべ}の中央^{ちゆうじやう}部^ぶに設置^{ていし}されていました。

遺物^{いぶつ}は、カマドに向^{むか}って右^{みぎ}・住居^{ぢゆうきよ}の南東隅^{なんとうぐも}の土器^{どき}などを貯蔵^{ちゆざう}していた貯蔵^{ちゆざう}穴^{あな}が設置^{ていし}されていたと考え^をられる箇所^{かしょ}を中心^{ちゆうしん}に出^{しゅつ}土^どし、土師器^{はじきつき}甕^{かめ}・甕^{だいつきかめ}、須恵系土師質土器^{すえきけい はじしつどき}坏^{かめ}・塀^{ふた}、須恵器^{すえき}甕^{かめ}、灰釉陶器^{さいろうとうき}碗^{さら}などが出土^{しゅつど}しました。

時期^{じき}は、9世紀末^{きゅうせいきはつばし}～10世紀初頭^{じゅうせいきしよ}と考え^をられます。

(2) 第2号竪穴建物跡（SI2）

A区の南東部^{なんとうぶ}、第1号竪穴建物跡^{しやうけつ}に近接^{きんせつ}し、そのほとんどが調査区域^{てんさくくわい}外^{がい}にあり、カマドのみが検出^{けんしゅつ}されました。カマドは、北向^{きたむき}きの壁^{かべ}の中央^{ちゆうじやう}部^ぶに設置^{ていし}されていました。また、焚^{たき}口^{ぐち}燃焼^{ねんじやう}部^ぶの補強^{ほきやう}材^{ざい}として主^{しゆ}に片岩系^{ぺんがんけい}の石材^{せきざい}が左右^{さゆう}に使用^{しゆじやう}されていたのが特徴^{とくちゆう}です。

遺物^{いぶつ}は、土師器^{はじきつき}甕^{かめ}、須恵系土師質土器^{すえきけい はじしつどき}坏^{かめ}・塀^{ふた}、灰釉陶器^{さいろうとうき}碗^{さら}・皿^{さら}、緑釉陶器^{りよくゆうとうき}碗^{さら}などが出土^{しゅつど}しました。

時期^{じき}は、10世紀前半^{じゅうせいきはん}と考え^をられます。

(3) 第3号竪穴建物跡 (SI3)

A区の南西部において検出され、建物の西部の一部が調査区域外にありました。カマドは、北向きの壁の中央部やや東寄りに設置されていました。

遺物は、土師器坏（暗文坏含む）・埴、須恵器蓋・長頸壺^{ちようけいこ}・甕のほか土錘などが出土しました。

時期は、7世紀末～8世紀初頭と考えられます。

(4) 第4号竪穴建物跡 (SI4)

A区の北西隅において検出されました。カマドは、南向きの壁の中央部に設置されていました。

遺物は、土師器坏（暗文坏含む）・埴、須恵器埴・甕などが出土しました。

時期は、7世紀末～8世紀初頭と考えられます。

(5) 第8号竪穴建物跡 (SI8)

B区の西部において検出され、建物の北部は調査区域外にありました。カマドは、南向きの壁の中央部に設置されていました。

遺物は、全竪穴建物跡中最も多く出土していて、土師器坏（暗文坏含む）・埴・甕・台付甕、須恵器蓋・長頸壺のほか土錘、平瓦、角釘、磨石などが出土しました。

時期は、7世紀末～8世紀初頭と考えられます。

(6) 第9号竪穴建物跡 (SI9)

B区の西端北寄りに検出されました。カマドは、北向きの壁のやや東寄りに設置されていました。また、本建物では、第2号竪穴建物跡とは異なり、カマドの補強材として川原石が使用されていました。

遺物は、土師器坏・甕、須恵器甕、須恵系土師質土器埴、ロクロ土師器埴のほか土錘、角釘などが出土しました。

時期は、9世紀末～10世紀初頭と考えられます。

(7) 第10号竪穴建物跡 (SI10)

B区の西端南において検出され、建物の南半分は調査区域外にありました。カマドは、北向きの壁の中央部に設置されていたが、第9号竪穴建物跡（9世紀末～10世紀初頭）に壊され、全体は不明です。

遺物は、土師器坏・埴・甕・台付甕、須恵器坏・甕のほか土錘、そして、挂甲の小札と考えられる鉄製品が出土しました。

時期は、7世紀末～8世紀初頭と考えられます。

4 おわりに

大竹遺跡の発掘調査は、今回が初めてで、これにより飛鳥時代から平安時代に及ぶ集落が発見されました。また、その具体的な時期は、7世紀後

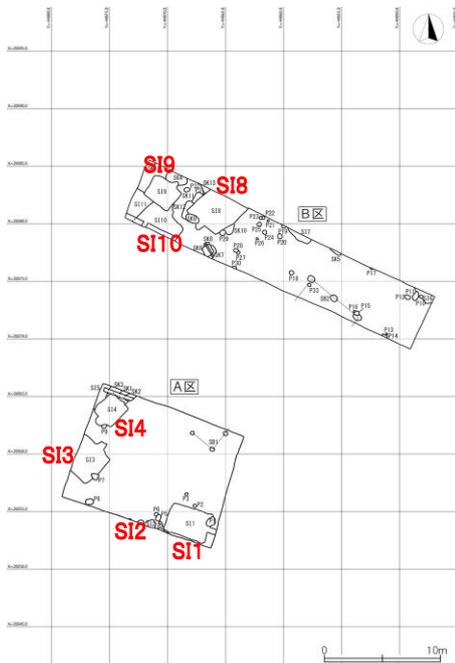
半から10世紀前半までの律令制度確立直前からの律令制度下です。

また、今回の調査地点は、遺跡範囲の北西端のごく一部でしたが、遺跡範囲の東端にあたる市立別府中学校校庭における過去の試掘調査成果などと合わせても、時期的に合致する結果が得られました。

集落の形成の変遷は、限定的な調査成果ではありますが、時代背景も併せて具体的には、集落は幡羅評家（郡家の前段階の役所）及び幡羅郡家を取り巻く位置に形成され、それは7世紀後半に始まります。7世紀末～8世紀初頭の律令制度が確立する時期、幡羅郡家が整備され、幡羅郡家の付属寺院（西別府廃寺）が創建され、7世紀中頃（7世紀第Ⅲ四半期・650～675年でも古い時期）に始まった祭祀場（西別府祭祀遺跡）での祭祀が、石製模造品を祭祀具の主体とする祭祀から土器を祭祀具とした祭祀へと変化した時期に、集落には最も多くの建物が造られます。それは、竪穴建物だけではなく、掘立柱建物も伴ったものでした。

その後、8世紀代には建物があまり見られなくなり、9世紀初頭～10世紀初頭になるとわずかに竪穴建物が造られるようになり、10世紀前半を最後に、集落を構成する建物はなくなっていくというものです。

今回の調査では、古代幡羅郡家（評家）と密接な関係のある集落の人々の暮らしの一端を垣間見ることができ、同時期の深谷市・下郷遺跡における集落の様子と併せて見てみると、郡家周辺には大規模な集落が計画的に造営されたことが分かりました。また、出土した挂甲小札は、郡家における軍事について考える上で貴重な情報を提供していると考えられます。



第8号竪穴建物跡遺物出土状況



調査区全測図(左)・全景写真(上:B区 下:A区) 第10号竪穴建物跡挂甲小札出土状況

平成30年11月19日発行

編集・発行：熊谷市立江南文化財センター（熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係）

わが街熊谷遺跡めぐり 大竹遺跡 テーマ展解説書